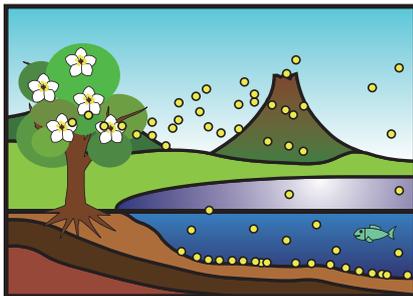


花粉分析

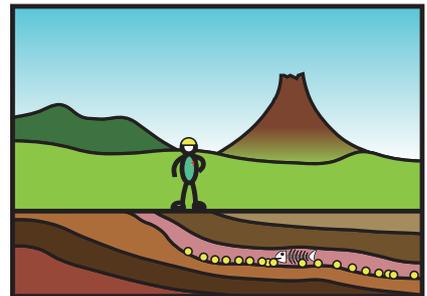
花粉は、外膜が化学的に安定で分解に強い、多量に作られ散布される、種類ごとに形が異なるなどの特徴をもつ。花粉は本来の目的（子孫を増やす）に使われるのはごくわずかで、大部分が地表に落下したものが水中などにたまり、化石として残る。これらの化石を種類と数を調べるのが花粉分析である。土壌中の含量が多いため、少ない土壌（10～20g）で分析が可能である。花粉分析は当時の環境を調べる示相化石としての効果面と、多産種の割合や消滅種の消長から地層の対比や時代を推定する示準化石としての効果がある。花粉分析では、化学組成が似るシダ類孢子等も検出され、これらも分析対象となる。これに合わせて、微粒炭、寄生虫卵、藻類の産状や、ケロジェンのタイプを調べることによって、水域環境や人間活動の影響などを知ることができる。



受粉しなかった花粉が水中にたまる



川やテフラにより埋積が進む



地層中に花粉化石が残る



分析に用いる薬品



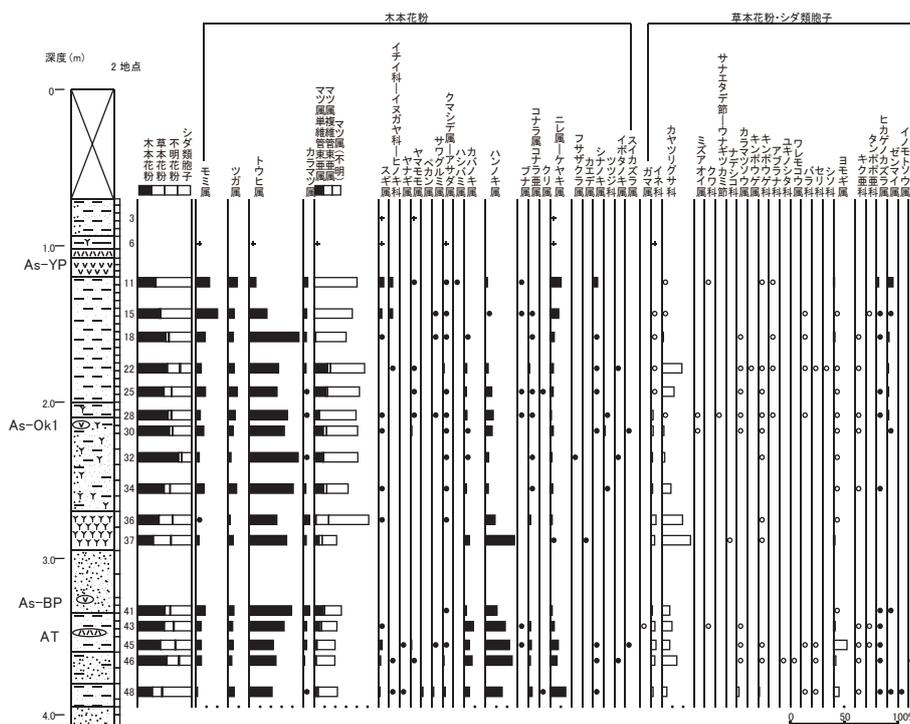
分析処理



検鏡作業



プレパラート内の状況



藤岡市の花粉化石分布図(徳永重元博士献呈論集より)

消滅種

ハリゲヤキ属

サルスベリ属

フウ属

ナンキョクブナ属

現存種

ブナ属

コナラ亜属

マツ属